



岡島永昌

[王寺町文化資源活用係 文化財学芸員]

天理図書館に保存されている保井芳太郎(1881-1945)のコレクションは、古瓦が約3000点、古文書古記録が約61000点に及ぶとされるが、実数は不詳である。保井の蒐集の動機は、好古癖というよりは郷土(王寺町)への強い憧憬であった。古瓦の蒐集・分類に始まり、培った新古鑑別の知識を基礎に郷土資料を集め、さらに実地調査の結果を総合する。そうして著したのが『大和上代寺院志』(1932)だった。本書は今も、寺院研究や発掘調査をするうえで、多くの研究者に基本文献として活用されている。

2019.6.5

「保井芳太郎の郷土史料収集とその後」

近世の

奈良を

見つめ直す。

近世奈良を語る会

井上さやか

[奈良県立万葉文化館指導研究員]

近世の万葉集研究は国学と並進したが、その先鞭をつけたといえるのが大和国・立田(宇多とも)に生まれた下河辺長流(1627-1686)だった。長流は三条西家に出仕して『万葉集』をはじめとした歌学に励み、『萬葉集管見』・『萬葉集鈔』など多くの注釈書や歌学書を残した。『万葉集』の代表的な注釈書のひとつである契沖の『万葉代匠記』も、長流が徳川光圀から依託されたものの、病により果たせなかった仕事を継いだものである。優れた歌人でもあり『晩花和歌集』『林葉累塵集』などの歌集が残る。

2019.12.10

「近世・近代の万葉集研究 -下河辺長流を中心に-」

山上豊

[奈良大学文学部非常勤講師]

明治8年の奈良博覧会は、明治政府の開化政策を背景に、廃仏毀釈で沈滞する奈良町の活性化を目指し、東大寺大仏殿外の東西回廊を会場として開催された。前年に組織された半官半民の奈良博覧会社が運営し、大和国内の各種物産品や寺社の宝物類を展示したほか、初めて正倉院宝物が一般公開され、80日間に17万人余の来場者を集めた。明治27年までに18回開催され、殖産興業に寄与するとともに、正倉院の再評価や宝物の模写・模造などによる伝統工芸の復興、帝国奈良博物館設置にも寄与するなど、全国レベルでの歴史的意義があった。

2019.7.26「奈良博覧会と博覧会社」





近世の 奈良を 見つめ直す。

近世奈良を語る会

岩坂七雄

[奈良市教育委員会教育部
文化財課主幹]

大和東山中(奈良県東部の大和高原地域)の神事芸能は、従来から春日若宮祭(「おん祭り」)の影響下で形成されたと考えられてきた。さらに近年になって、特に同祭の後日行事(「後宴能」)との関係が注目され、12世紀に興福寺大衆の要請で復行した田楽・相撲を、在地領主層が自領の祭りに取り入れた可能性が考えられる。大和高原の神事芸能は、近世・近代・現代において伝承母体や芸能の態様を変化させながらも、消失することなく継承されており、村人たちが祭りという「村の信仰」を介して自他確認できる役割も併せ持つと思われる。

2019.11.11「大和高原の神事芸能」



松久保秀胤「薬師寺長老」

薬師寺の年中行事の中心になるのは「金光明最勝王経」だ。なかんずく発願された天武帝が王道論に従った施政を目指されていたとすれば、四巻本の「金光明経」以外にはあり得ない。同経が道昭（飛鳥時代の法相宗の僧）の招来によるものである以上、薬師寺の創建は「学説では、今なお天平創建説が存在するが」「日本書紀」の記述どおり、天武帝期と考えるしかないだろう。また薬師寺の正月行事は1〜3日の「元参会（がんさんえ）」と、8〜15日の「修正会」とに截然と分けられている。前者は僧侶の研学増進の行事で、後者は悔過法要だ。このように正月の法要が分かれているのは、飛鳥白鳳期に持統帝が金光明経百部を写経し、全国の郡（こほり）〈評〉家を中心に百ヶ寺に配布し、修正会は「正月の上期に始めよ」と勅令されたことに由来する。寺の行事は縁起に関わっており、文献上の記録がエビデンスとなる。

2019. 5. 24 「薬師寺の年中行事」



寺岡伸悟

〔奈良女子大学文学部教授〕

「柿」は世界各地で栽培されるが、「Diospyros Kaki」の学名で知れるように、日本に極めてゆかりの深い果物である。特に「完全甘柿」の原産地は奈良県御所市とされ、『日本山海名物図絵』（1754）では、「和州御所より出す柿の極品なり〔…〕御所より出る名物なる故に御所柿と云ふ」と紹介されている。一般に柿は接ぎ木で育成されるが、譲り受けた御所柿の枝が枯れないよう、大根に挿して郷里に持ち帰ったという江戸期の逸話も残っている。生食ばかりでなく「柿の葉すし」を含め、奈良には柿をめぐる豊かな地域文化が息づいている。

2019. 9. 25 「大和の柿とその文化」





岡本彰夫「神主・奈良県立大学客員教授」

文久3年(1863)、奈良の五條・吉野地域を巻き込んだ「天忠(誅)組の変」は、義拳とも暴拳とも言われ、その評価は一定しないが、これに加わった志士たちの「利他」・「責任」・「再生」の思いは今を生きる者の心を打つ。同年8月13日「大和行幸」の詔が発表されると皇軍御先鋒団(後に「天忠(誅)組」と称される)が組織され、17日に五條代官所を占拠(代官を殺害)し「五條御政府」を樹立する。しかし翌18日京都の政変で行幸は中止、天忠(誅)組は一夜で「朝敵」となり吉野山中を逃走して、終には全滅する。彼らの旗印は「心公平無私」。天忠(誅)組は、この自覚をもって「天道に則り世を正す」ことを実践しようとした。行為の暴拳は許し難いが、志の高さや最期の潔さ、世のため人のために身を尽くす信念は、重く受け止めるべきではないか。

2019. 7. 12 「天忠(誅)組ノ変 百五十年 幕末大和争乱」

中島敬介「奈良県立ユーラシア研究センター特任准教授」

英国ヴィクトリア期の女性旅行家・イザベラ・バードは、明治11年(1878)の日本-内地-旅行の途中、奈良に立ち寄っている。バードには二つの奈良が映っていたようだ。不意にでくわした「初瀬(長谷寺)」に、日本旅行で最大・最高の賛辞を捧げる一方、奈良公園周辺などの有名観光地には、全く関心を寄せなかった。世界史上類例のないスピードとかたちで変容していく日本に惹かれたバードにとって、奈良はデスティネーションとすべき「内地」ではなかったのかもしれない。

2019. 6. 14

「異邦人がみた明治期の奈良(大和)―イザベラ・バードの場合―」

福家崇洋「京都大学人文科学研究所准教授」

座談会・「近代の超克」にも出席した鈴木成高(京都学派の西洋史学者)の論文「保守といふこと」の掲載により、月刊『心』は戦後「保守派」の代表誌とされてきた。しかし同誌「同人」の層は幅広く、京都学派・白樺派・三年会だけでなく奈良の天理を本社とする「養徳社」の執筆陣も含まれていた。同社は戦時統制経済下に数社合併で発足し、1950年代までの出版物は多彩な著者・分野に及ぶ。養徳社の刊行物分析で、戦前戦後の「保守思想史」の断層が埋まるかもしれない。

2019. 9. 27 「養徳社の風景」



奈良に 蒔かれた 言葉と思想。

近世・近代の思想研究会

西田彰一

[日本学術振興会特別研究員/PD]

上司海雲師(第206世東大寺別当/住職)が主催した「観音院サロン/天平の会」は、会津八一・杉本健吉・須田剋太・志賀直哉・入江泰吉ら県内外の多くの文化人が集う場であった。この豪華メンバーで昭和22年(1947)年には雑誌『天平』を発行、「天平出版部」も組織化されるが、足並みの乱れから第三輯で休刊となる。一方展示会など会活動は継続、海雲師在世中はサロンの集まりも続いた。短期とはいえ、奈良から始まった敗戦直後の文芸復興の動きとして意義深いと思われる。

2019.9.27

「観音院サロンにおける交流の諸相」

阪本基義 「元東吉野村教育長」

東吉野村は、「天誅組」終焉の地として、155年間ずっと志士の方々をおまつりしてきた。その高い志には、素直に頭が下がる。一方で、近代以降の日本に、どれだけ・どのような影響を与えたのかと、時折考えることがある。志士たちは、どのような日本をつくりたかったのか。国家の力が強くなって、日清戦争以降戦争に明け暮れていく日本を見れば、どのように感じただろうか。大いに満足しただろうか、あるいは、こんなはずではなかったと嘆息していたかもしれない。

2019.8.19 「天誅組の風景」



奈良に 蒔かれた 言葉と思想。

近世・近代の思想研究会



植村和秀 [京都産業大学法学部教授]

政治と宗教の関係は、古来世界各地で様々な様相を呈してきた。近代国家の登場によって、宗教に対する政治の優位性は決定的なものとなったかに見えた。しかし、今日、活性化した宗教の一部は、新たな政治状況での火種となりつつある。日本はこのような世界的動向と無縁でいられるのだろうか。明治維新以降の変化、帝国憲法と神道の関係、1940年までの宗教法不在の事態も含め、あらためて日本の宗教の公的な位置付けの歴史を振り返る必要があるのではないだろうか。

2019.6.14 「昭和期日本の宗教と行政」

桐原健真 [金城学院大学文学部教授]

古典漢語の「公論」は、「天下後世による評価」といった人為の及ばぬ超越性を意味した。しかし、幕末には、真逆の文脈の中に現れるようになった。例えば、1858年の吉田松陰意見書には「天下の公論を採聴」の文言が見えるが、その「採聴」すべき「天下の公論」とは、「いま」「ここ」で行われている具体的な行為としての議論そのものを意味している。「公論」は、本来の普遍性・公平性を有するものから尊攘志士が自らの主張を正当化する語彙として使われているようになったのである。

2019.11.8 「『公論』とは何か」





福井良盟「竹林院主／（公財）吉野山保勝会理事長」

信仰の象徴である吉野山の桜にとって史上最大の危機は、明治の神仏分離令と修験道廃止令だった。新政府の方針により全山の桜の伐採・売却が決まる。隣村川上村の山林王・土倉庄三郎によって窮地は救われるが、その後も大きな危機が待ち受けていた。軍国主義が急成長すると、桜は軍隊の勇敢さや散り去る潔さの象徴とされてしまった。戦時に世の風潮で盛り上がった吉野の桜は、戦後は一転して困難な状況に陥った。吉野山の桜の歴史は、激動する近代日本の鏡像とも言える。

2019. 8. 19「幕末維新の吉野山」

大川真 [中央大学文学部准教授]

近代日本の政治テロは「斬奸状」という声明文を公表し、テロリストたちは自らの行為の正しさ主張した。その濫觴は「桜田門外の変」で、このときの斬奸状で注目されるのは、その正当性の根拠に、天皇の「攘夷祈祷」が使われたことだ。国内外の危機に際し、国民国家の統合が重要課題となるなか、国民国家の平安を祈る天皇の「姿」が利用されたのだ。「祈り」の求心力は戦後なお継続し、象徴天皇制において「祈り」はより前景化し、象徴の内実となっていく。

2019. 8. 20

「幕末思想はなぜ過激主義化したのか」



井上さやか

[奈良県立万葉文化館指導研究員]

一般に、近世における万葉集の受容が国学の隆盛とは不離とされるなか、注釈書系統とは別に、『大和名所記』（1681年）・『大和名處和歌集』（1779年か）・『大和名所圖會』（1791年）などが記されている。万葉集を含め多数の歌集から名歌を取り、奈良の名所・旧跡が紹介されている。在地の伝承も詳しく記録され、近世大和の史跡・文学史研究上の価値もある。また、海外で最初の万葉歌の紹介は開国以前に遡り、その1834年刊のフランス語版『日本王代一覽』には「天平勝宝」等の漢字活字も使用されている。

2019. 8. 20

「近世・近代の万葉集研究」



谷山正道 [元天理大学文学部教授]

近年の谷家文書調査で、「近代紡績の父」と称される石河正竜（確太郎／1825-1895）が、谷三山の門人であったことが分かった。石河は大和国高市郡石川村に生まれ、三山の薫陶を経て江戸・長崎に遊学、島津斉彬に召し抱えられ薩摩藩士となり、同藩経済の担い手となった。明治期には新政府に出仕し、富岡製糸場を含め全国紡績工場のほぼすべてを設計・建立するなど日本の近代綿糸紡績業の育成に奔走した。石河の時流や世界を見つめる視点には、師の谷三山からの学びが感じられる。

2019.9.17「石河正竜の活動と谷三山」



小林丈広 [同志社大学文学部教授]

近年発見された谷家文書の猪飼敬所書簡は、刊行本の「猪飼敬所先生書簡集」（『日本芸林叢書』）にも掲載されている。両者を照合すると、刊行本は谷家文書の半分ほどしか一致せず、抄録であることが判明した。原文書から抄録された写本から転記されたと思われる。猪飼敬所研究は、刊行本を手がかりに進められている段階で、使われた写本が参照した原文書との突き合わせが課題となっている。その意味でも谷家文書発見の意義は大きい。猪飼の書簡も含め早期の翻刻を期待したい。

2019.12.17「猪飼敬所書簡から見た谷三山研究の可能性」



谷三山、 師の師 たる人。

谷三山研究会

吉田栄治郎「公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫研究員」

谷三山の門人・岡本通理（1817―？）が著した『振灌録』（1856）は、「夙」の考証書で、自述によれば中野某という人物の依頼に応じて書かれた。近世中期以来、夙の淵源については守戸説（土師部末裔説・非人宿説・巫祝説など見方が多様に分かれていたが、畿内では「家系之由来」（1766／五條家下付書）の守戸説に拠って各種脱賤運動が展開されていた。通理の『振灌録』は昌平賢官許の書として刊行された。これにより明治初年以降、守戸説が社会的認知を得ていたが、近年非人宿説が有力になっている。

2019. 11. 29 『振灌録』刊行の歴史的意義

橋本紀美 [安堵町歴史民俗資料館館長]

今村文吾（1808-1864）は、『大和人物志』（1909）の記述等から「過激な尊攘家」と見られてきた。しかし今村家当主・春日若宮おん祭りの願主人・医師・歌人・私塾「晩翠堂」の経営など多様な側面を持つ文吾の実像は謎に包まれている。大和八木の思想家谷三山・天誅組で知られる伴林光平・明治政府で栄達した北畠治房・中宮寺宮を中心とする人々との関係、また晩翠堂や和歌の会の活動実態・その門人の姿などの解明によって、幕末維新期における奈良の知的空間を再現できるのではないか。

2019. 7. 5 「今村文吾と晩翠堂」



谷三山、 師の師 たる人。

谷三山研究会

奥本武裕

[奈良県立同和問題関係史料センター所長]

大和五條の儒者・森田節齋(1811-1868)は、学者間の論争などで名声を上げていくが、その背後には谷三山の校閲など知的側面での支えがあった。節齋は終生谷三山を敬愛したが、同時に『愛静館筆話』などから、気の置けない「仲間」として自由闊達に本音の意見を交換していたことがわかる。節齋は有名でない人物の伝記を進んで著し、晩年に被差別部落出身の中尾靖軒を門人とした。民政重視を貫いた三山とは異なる角度からではあるが、節齋もまた、市井の人々の姿に関心を持ち続けた人物であったと考えている。

2019.11.6「谷三山と森田節齋」



山上 豊 「奈良大学文学部非常勤講師」及び研究会メンバー

文吾については、資史料に基づき『大和人物志』で流布されたレッテルの剥離に成功している。新たな(生身の)文吾像の提示は今後を待ちたい。勤三については、これまでから実業家の側面に光が当てられ、政治家・勤三の姿が希薄であった。奈良県再設置運動とも関わって、彼の地域論・国家論を探る時期にきているのではないか。荒男を含め今村三代の知の系譜の内実をどう見るか。明治維新から文明開化を経て日本(人)自覚に至る、日本近代の問題として捉え直してみたい。

2019. 8. 29

「合評『知の系譜―今村三代文吾・勤三・荒男―』(明治150年『安堵風土記』別冊)」

